

北国の港町で、朝夕港湾建設工事を見て育ち、砂や砂利やトロッコが遊び道具であり、すえつけたケーソンが激浪に耐え抜いた喜びが忘れられなくて、“これこそ人間を幸せにする仕事”と気負った気持で専門学科を“土木”と選んだそのときに土木学会に入会したのであるから、私の会員歴も30年をこえる古狸となった。

初めのうちは毎月の学会誌を待ちかねて、当時の流行であった平版の応力、桁のねじれ、振動理論等の論文を十分理解できぬまでも一生懸命に勉強したものであるが、四、五年たつうちに次第に不精になって、近年は標題と梗概を斜めに読むのが精一杯で、ときにはそれすら忘れるというスリーピングメンバーになり果てた次第である。

そういう私が、地区支部の責任者になれというご命令で不承不承お引受けすることになったのは、生れつきのことわり下手の故もあるが、己がまわりを見渡してみると、どうも私に似た居眠り会員が多いことに気づいた故でもある。そして土木学会活動ならともかく、学<sup>の</sup>字の抜けた土木会の推進役なら私でもまるきり不適任ということでもあるまい、というのが就任のいいわけである。

かねて考えることであるが、土木学会の会員に三通りある。土木工学研究者、土木技術者、もう一つは私の仮称で“土木屋”というのがそれである。“土木屋”というのは、直接、間接に、土木技術を判断の基礎としながら、さして技術的ならざる業務にたずさわる人達のことである。たとえば神戸や名古屋の市長さんも土木学会会員のはずであるし、下っちは私のごとく、どうやったら鉄道のお客が増えて大入袋が出せるかという低級なことに日夜頭を使っている者もあり、そうでなくても設計協議や用地買収が仕事の大部分となっている土木技術者は決して少なくないし、金融や労務者集めに走り回る人もいらずである。

この“土木屋”という人種の存在することが、“土木工学”の特質なのである。土木というのが本来、未開、未分化の工学であって、道路、港湾、河川、鉄道等々、学校の課目の間に何ら関連性がない。そして土木事業そのものは、市民生活の安全と利便に重大な関連を持つ公共事業が大部分である。従って、特殊な専門家の育つ反面この事業計画の実施には豊富な社会常識が必要となる。与えられた境界、条件の中で、最大の効率をあげる事業を行なうには、関係する土木技術者の強い信念、説得力、融通性等が必要となり、ストレス、ストレインに基礎をおいた雑学的技術者が生れるのである。また、施工業者の側から考えても、近年、技術的に高度な成長を見せては

いるが、本質的に受託や金融がより大きな問題とならざるを得ない。要するに日本の土木技術者は、一般には年とともに土木屋に近づくように運命づけられているといえてよい。それを技術者の墮落と考えるか、アウフヘーベンと考えるかは本人の心がけ次第であるが、どうも避けられない事実のようである。

そこでわが土木学会が、土木事業関係者の有力なる集合体として発展しようとするならば、どうしても会員の相当数を占めるわが“土木屋”族により積極的に働きかけ、彼らを眠りからさまして意欲的会員とし、その支援と協力を受けなければならない。

そのための方策はいろいろあろうが、たとえば学会誌にしても、 $dy$ 、 $dx$ の偏重を改め（大分気を使っておられるようだが）、より今日的な問題にページをさくべきであろう。道路、河川、港湾、鉄道、等々の接点における諸問題についての匿名座談会など面白い企画と思し、材料には事欠かないはずである。国会討論会式に各関係人に我田引水論をやらせ、大方の批判を受けるのも面白かりし、それによってより公正な解決の生れることも期待できよう。

さらに土木学会にはいくつかの委員会があるが、その中に「請負契約の問題」「事業全体間の費用分担問題」「設計協議」等々の生ぐさいものをつけ加えられぬものだろうか。もちろん、法制上の制約もあり、ものによってはお役所のご機嫌を損ねることもあろうが、それによって土木事業の円滑な運営が期待されるならば、それだけ、国民の利便が増進されることにつながるのであるから、ご諒解願えるのではあるまいか。細かいことはとにかく、少数の学識経験者を選出してトラブルを聴取する仕組みくらいは実現したいものである。さる識者がイギリスの議会の沈滞を見て、同国のスタミナ不足を痛感し、まだ日本の乱闘国会の方が頼もしいといっておるが、わが土木学会にも、もう少し活力を持って欲しいものである。“土木”というのは本来ミネラルの濃い、あくの強い水であって、決して蒸溜水ではない。それを蒸溜水的運営に終始することに問題があるのではあるまいか。さりとて、せっかくの親睦団体につまらぬ論争を持ちこむのが本旨ではない。そのへんの運営は少壮役員諸氏の良識によらねばなるまい。

私に与えられたスペースはつきたようであるが、かかる悪文を速製し、学会誌の巻頭を汚すことになって汗顔の至りである。しかし、もしこれによってスリーピングメンバー諸氏が一人でも学会運営に何らかの意識を持っていただけたら、筆者望外の喜びとする次第である。

\* 正会員 土木学会中部支部長・国鉄中部支社長